



サンタ・マリア修道院聖堂 11世紀 ポンボーズ、イタリア

# 金沢百枝

美術史家

古いものが好きなのは、小さいころから引越しが多かったせいかもしれません。父の仕事の関係でインド、イギリスと日本を往復し、一八回も住む家が変わりました。引越しのときは子どもはワガママもつうじなくて、ほんとうに大事なものを以外もってゆけません。なんにもない新しい部屋に入ると、自分が自分でなくなつたようでさびしかった。そんなときに私をなぐさめてくれたのが、古いものでした。

ロンドンの蚤の市で買ったブリキの衛兵。研究室の片隅から拾つてきた実験器具。祖父がくれた双眼鏡。干からびた檸檬。パリ土産のドゴン族の小さな梯子。それらのものは、どうしようもなくゆれうごく私という存在に定点をあたえてくれる礎。新しい部屋にどれかひとつでも置けば、そこは私の居場所になりました。

ロンドンで蚤の市めぐりをしていた一〇代のころから、整いすぎたものは好きになれませんでした。理系から文系に転じて大学院へ進んだとき、ロマネスク美術を専攻したのも、肩のちからがぬけた造形に心ひかれたから。それは当時の私の眼に、まるで川辺でひろう小石のようすがすがしく映ったのです。

はじめてロマネスク聖堂をたずねたとき、おかえり、と出迎えてくれた気がしました。それ以来、よく晴れた丘や、もやがかつた沼地や、陽光にかがやく菜の花畑のむこうで、ロマネスクの鐘塔がいつも私を待っていてくれる——そう思うと、この世界への違和感もうすれてゆきます。



Momo Kanazawa